

津田塾大学同窓会英語英文勉強会 2024 年 10 月 5 日 於津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス
「ワーズワスとコールリッジ 1795-1805 ――共生と創造――」(山内 久明氏)

[(備考)文中の人名略号 WW=William Wordsworth; DW=Dorothy Wordsworth; SH=Sara Hutchinson;
STC=Samuel Taylor Coleridge]

- はじめに

本日は、WW と STC が相互に影響し合いながら二人の詩作品が生成された過程を辿り考察を進める。本講演を通じて、WW と STC の作品には客観的に見て普遍的な価値があることを示せば幸いである。

副題にある「共生」Symbiosis の語源は sym (共に) と biosis (生きること) を意味するギリシャ語に遡る。本来的に、大小異なる生物が相互に扶助する互惠関係を通じて共存することを意味する。他方、WW と STC の場合には大小がなく二人は対等の関係にある。二人の関係を「共生」という言葉で語る場合は、厳密に生物学的な意味ではなく比喩として使用する。二人は対等な関係の独立した人格として、相互に触発し、進化し、詩的創造へと向かう。時には対立・反発し、関係性は緊張を伴うが、それを経て新たな局面が展開する。二人は言葉を紡ぐ詩人であり、紡ぎ出された詩的言語がどのように響き合うか、作品を通して見ていきたい。

- WW と STC の伝記的な関係性

WW と STC は 1795 年 8 月にブリストルで出会い、1795-1805 年の 10 年間は Great Decade「偉大な 10 年」と呼ばれる。この時期に、二人の文学的交流が最も豊かに実った。但し、二人には 1795 年以前の前史があり、1805 年以降にも多くの著作があることを附言したい。

WW は、革命への共感から 1791 年にフランスへ渡ったが、革命の成り行きに幻滅・挫折し 1792 年に帰国する。他方、STC は新大陸ペンシルバニア州に、「美しい村」、ユートピア的共同体 (Pantisocracy) 樹立を 1795 年に計画する。しかし空想的計画はすぐに挫折する。二人はともに心に傷を持つが、WW の詩には、奈落の底に落ちてそこから立ち上がる回復力が顕著に認められる。出会った頃、二人はともに過激な急進主義者であった。政治的信条、挫折体験、詩作と文学理念の三つの面で共鳴したことが二人の「共生」の出発点となり、二人の創作活動は Great Decade を通じて花開いていく。

- “Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood”

WW の代表作であるが、冒頭の 4 節を書いただけで中断、完成までにほぼ 2 年を要した。その過程で STC も深く関わる複雑な歴史がある。冒頭は以下のように始まる。

「かつては牧場も森も小川も / 大地も、目に映るありとあらゆる光景が / 私にとって / 天上の光に包まれて見えた、/ 夢の中の栄光と瑞々しさに包まれて見えた。/ だが今はかつてとは違う。/ どちらを向いても / 夜であれ昼であれ、/ もはや今、かつて見えたものを見ることはできない」

これは WW と自然との関係が変化し、何かが失われた危機感にほかならない。そして、「あの幻の輝きは今いずこに、/ あの栄光と夢は今いずこに」という問いで第4スタンザが閉じられる。1802年時点では答えを出すことができない WW は、執筆を中断し頓挫せざるを得ない。詩が完成されるのは1804年の3-6月になってからのことである。

- 書簡詩“Letter to Sara”から“Dejection: an Ode”へ

“Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood”の冒頭の4つのスタンザに共鳴し、触発されて STC が書いた作品が“Dejection: an Ode”の元になる SH 宛の書簡詩である。当時、不健康や家庭の不和を背景に慢性的に落ち込んでいた STC は、WW と同様に自然の美しさに反応する心の活力を失い、詩的想像力の停止が危惧され、その状態は WW 以上に深刻であった。

340行にのぼる書簡詩を139行の“Dejection: an Ode”として公表する以前に、STC はその一部を複数の知人への私信に引用し書き送っている。その過程で、書簡詩の STC と SH に関わるプライベートな言及は削除され、現行の“Dejection: an Ode”とほぼ同じ長さと同様に編集され、呼びかけの対象は SH から WW へと置き換えられる。STC は“Ode: Intimations of Immortality...”冒頭の4節に触発されて書かれた自作を WW が読むことを強く望むとともに、自身の置かれた状況を WW とも共通する普遍的な問題に擬装して読者に提示した。この創作過程には二人の複雑な「共生」関係が絡んでいる。

- “Resolution and Independence”

自然の美しさに感動し、幸福と法悦に浸る語り手としての詩人が、突如として将来に対する不安と杞憂に苛まれ暗鬱な気分になる、説明しがたい躁から鬱への唐突な転換から始まる。STC にとって深刻で根源的な意味を持つ‘dejection’という言葉が、この詩では‘despondency’という言葉に置き換えられ、WW の破綻、挫折、奈落の感覚として重い意味を持つ。

詩の後半で語り手である詩人は、医療用のヒルを集めて細々と生計を立てる老人に遭遇した経験を語る。詩人は、極限状況の中にありながら毅然として生きる老人の姿から教えられ、強く自立への決意を固める。“Resolution and Independence”は、STC の“Dejection: an Ode”(この段階では SH 宛の未公開の書簡詩)を意識しつつ、自身の未完の“Ode: Intimations of Immortality...”冒頭の問いに対して WW が出した当面の答えであった。

- “Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood”の完成

中断後に書き継がれた“Ode: Intimations of Immortality . . .”において、WW はプラトンに倣い、未生のイデア的世界に対して現象界としての現実世界における人間の成長過程を退化と墮落として規定する反面、子ども時代特有の特権ともいうべき、自然との関係における主客未分の知覚・認識の様態を称揚し、大人はそこに戻ることができなくとも、それを想起することが精神的活力の源泉となるとする。その結果として、1804 年 3 月から 6 月にかけて完成された“Ode: Intimations of Immortality . . .”の最後の二つの段落で、WW は歓びに満ちた自然に参入し、自然に呼びかけ、「自然のより恒常的な支配のもとで生きる」（‘beneath your more habitual sway’）決意を宣言する。

● *The Prelude*

WW が *The Prelude* のモデルとして意識した John Milton の *Paradise Lost* では、詩神 Nine Muses への呼びかけが行われ、詩人はその靈感を得て創作するという体裁を取る。それに対して本作品においては、詩神に代わり STC への呼びかけが詩の随所で行われ、STC から靈感を得て WW が この詩を創作する体裁を取る。詩の創作は二人の共生と不可分の関係にある。

The Prelude の元となる詩は、WW がドイツ滞在中に執筆が開始され、子ども時代を扱う 1 部と 2 部が書かれた（1799 年版 [2 部構成]）。その後、1800 年代に書き継がれ、1805 年にいったん完成した（1805 年版 [13 部構成]）が、1842 年まで推敲・改稿がつづけられ、ようやく 1850 年に死後出版された（1850 年版 [14 部構成]）。すでに 1799 年版第 2 部に含まれ 1805 年版第 11 部に再出する‘spots of time’の挿話の趣旨は、完成版“Ode: Intimations of Immortality”の子ども時代特有の主客未分の知覚・認識に通ずる。WW の異なる作品の部分部分の創作は時間の中で交錯し、繰り返しや書き直しを通じて相互に補強・補完し合う。

● *Biographia Literaria*

BL と言えばロマン主義の根本原理である Imagination の定義が有名であるが、後半で展開される WW 論は文学批評として傑出し、WW の詩の本質を的確に把握しその卓越性を浮き彫りにする。一例として、“Resolution and Independence”における老人のイメージの生成過程の分析（*BL* 22 章）は、分析的実践批評の最高のモデルと言える。ここには、詩人としての WW と批評家としての STC の「共生と創造」の姿が見られる。

● おわりに

本日は「共生と創造」という観点から WW と STC の詩作品の生成過程を辿った。二人の作品には挫折と、挫折からの回復というパターンが繰り返し見られる。WW の場合には、子ども時代の原体験が回復の力となることが、願望を超えて信念として提示される。“Dejection: an Ode”に見られるように STC も精神の奈落を体験するが、心の深淵を深い詩的・哲学的洞察をもって探究した。詩人が自らの苦境と、苦境からの回復を語る詩を読み共

感ずる読者がそこに癒しと救いを見出すとしたら、詩には生きる力のヒントが隠されている。